

辛口の川柳を読んだりひねったりしているが日本の文化である歳時記は手放せない。

季語に頼ると 俳句である。

二兎を追えば一兎も得られぬ例えがあるが「まあいいか」と芭蕉に叱られそうな句をひねっている。

ご縁があり、滑稽俳句協会に入会した。「俳句は詠み手と読み手で作るもの」老老の「柳・俳」をお笑いだされば幸いです。

「新年」

◆ ああ言えばこう言う子らと初詣

兄弟姉妹は七人だが、子は男三人で打ち止め。少子化の世だから孫は三人。成田の不動尊へ反抗期の三人の子と初詣に行ったのは30年前である。

「うまくやれとうまくやれない親が言い」鳶が鷹の子を産むわけがない。今、その子たちが反抗期の孫に手を焼いている。

◆ 読み初めのジャンクリストフ持て余す

人並みに血気盛んな十代に三日三晩かけて読んだ記憶のある本をつれづれに酔った勢いで手に取ったが読む気よりも眠気が先に来た。

拾い読みしたがむかしは戻らなかった。目も歯も口も悪くななったが幸か不幸か足だけが達者なのが有り難い。

◆ 飽くことのなきロボットと仕事始

金子兜太(選評)・・・原句は「業始」だったが慣用の季語に直しておいた。この方が語感が落ち着く。

ロボットの出し方に心情がこもっている。現役の頃はロボット並みに働いた昭和ひと桁の癖が治らず。「忙しくしておりますと書く賀状」と偽装する。余命ひと桁になった老老の哀しくも愚かな五七五である。

「春」

◆ もういくつ寝ると定年四月馬鹿

時実新子(選評) 「近づいた定年の日を思う」「もう幾つ寝るとお正月・・・」をもじったりして淋しくもあり楽しくもありの心境に四月馬鹿がよくマッチしている。」

平成の今は「定年」は死語となった。幸か不幸か政府は「年金は飢えず太らぬ額に決める美しく豊かな国である

◆ いい年をしてなど言はぬ犬ふぐり

年齢制限のある日本はある面で公平なようである。
しかし、老化するに従い個人差が大きくなる。「年寄りの冷水」など出る釘は打たれるので元気な老人は住みにくい。花は人に優しい。人間のようにやかましくない。分相應に咲いて散るだけである。

◆ 子の小志父の大志や山笑ふ

戦前の「末は博士か大臣か」はともかく、昭和ひと桁のサラリーマンなら役員か社長を目指すのが当たり前だった。平成の今は「社長よりなりたい平の正社員」の世であるらしい。派遣社員との格差が大きいのであるが、制約の大きい正社員も楽ではないようだ。

「夏」

◆ 怒ったら怖い父の日祝ひけり

訓導の明治の父を持った昭和ひと桁の子は父の血を引く。
はからは、「怒らなくても怖い父」だったと言う。
平成は「何時までも父母になれないパパとママ」である。
大地震でもないかぎり「父の日」など思い出すことはない。

◆ 夏祭妻を行かせて聞きにけり

八木宗匠(選評) 「恒例の夏祭だから同じようなものだ。
だからと言って今年の夏祭について無関心ではない。気になる。それでは俺も行くか」

・ ・を読んだ悪老が「季語が動く、夏祭よりは姫始だな」
と言う。なるほどと思うがもう昔のことだ。

◆ 悪いコトまだ出来る齢さくらんぼ

時実新子(選評) 「なに、悪いコトたって火付け強盗や人殺しなんかではありません。せいぜいパチンコか場外馬券、ほんのときたま若いうっふん娘のお店ぐらいのものです。
さくらんぼが鍵です」分かってないんだなあ。
平成20年、男の平均寿命は80歳ですぞ。まだまだ黄色いさくらんぼだぜ」

「秋」

◆ 存分にへそ曲げてみる敬老日

伊藤通明(選評) 「一読吹き出してしまいました。
敬老日なんて変な日があります。
子どもたちが少しあらたまって接してくれるものですが充分承知の上でへそを曲げるのです賛成」とどのつまりは
「敬老日独りで回る皿つまむ」というはめになる。

◆ 牧水と言ふ友と酌む新酒かな

リタイヤして10年も経つと現役の頃より酒を飲む機会も少なくなり酒の量も減る。

酒友もドクターストップを食ったり、お先にと天国に旅立つ者も増えてくる。そこで独り酒は淋しいので牧水を相手に飲むことになる。

「天国に近い居酒屋夜の秋」の心境である

◆ 酒以外断つて淋しき夜の秋

時実新子(選評)「秋の夜の酒は静かに・・・・」と言うけれど、あれも諦めこれも断ち、独りで秋の酒である。酒に訴えの焦点が集められたため、よりしみじみとした一句となった」その酒だって「妻上戸夫は下戸や冷奴」である。

「冬」

◆ 一つ家に冬の蚊と住む喜寿と古希

「寝に帰る家だけ残り職を退き」築25年、稽古茶仕立ての木造二階建てのわが家は震度5で間違いなく崩壊する。家屋全体が老朽化しており、冬でも蚊が出る。

離れ住む子も寄り付かない。「はせを」をするには風情があるがこれが終の棲家である。

◆ 古希までが喜寿迎へけり日向ぼこ

少子化で長命化の日本は「だまされる人も長寿も世界一の国。喜寿では日向ぼこなどしてはいられない。

「喜寿までが米寿迎へけり日向ぼこ」かな「百寿超え天国でする日向ぼこ」であろう。

ともあれ、天国へ行くまで心臓だけで生かされる豊かな国なのである。

◆ きっかけがつかめず歳暮止められず

浮き世の義理で律儀に盆暮れに付け届けをしている腐れ縁の朋友が数人いる。時節になるとそれとなく心待ちしている気配がするので止めるわけにはいかない。

贈り物ができるのも元気なうちと納得している。「買うものでなく貰うものメロン届く」と礼状が来る。